

6

またもや話が少し横に逸れましたので、元の東欧系ユダヤ人の話に戻ります。

というのは東欧系のユダヤ人がイスラエル建国において果たした役割について、どうしても述べておきたいことがあるからです。

というのはイスラエルという国をつくろうとする動きは、本来のユダヤ人の血が流れていると考えられる中近東や北アフリカに住むユダヤ人ではなく、東欧系のユダヤ人から出てきたからです。

そもそも「ユダヤ王国が崩壊した地シオンに、再びユダヤ人の国をつくろうとするシオニズム運動」の祖とされるテオドール・ヘルツルも、ハンガリーのブダペスト生まれでした。彼は一八九六年に、シオニズム運動のさががけをなす著作『ユダヤ人国家』を出版しました。

つまり、パレスチナのユダヤ王国が崩壊してユダヤ人が離散したとき、多くのユダヤ人はまず西アジアやスペイン南部、アフリカ北部に住んだと考えられるのですが、シオニズム運動は、この直系のユダヤ人から出てきたわけではないのです。

7

パレスチナの地にイスラエルというユダヤ人の国をつくる直接のきっかけになったのは、いわゆるイギリスの「三枚舌外交」と言われるものでした。これをウイキペディアは次のように説明しています。

一九一四年、第一次世界大戦が勃発し、オスマン（トルコ）帝国はドイツ、オーストリア＝ハンガリー帝国の三国同盟側で参戦する。

イギリスは戦争を有利に進めるため、「三枚舌外交」と呼ばれる数々の密約を結んだ。フランスやロシアとはサイクス・ピコ協定を結び、アラブ人とはフサイン＝マクマホン協定を結んだ。

そしてユダヤ人に対してはバルフォア宣言を行った。これは一九一七年一月二日、イギリス外相バルフォアがユダヤ人の民族郷土建設について支持を表明したもので、ロスチャイルド卿に宛てた書簡に記されていたものである。

つまり、イギリスは、第一次世界大戦でオスマン（トルコ）帝国を敗北させた後に、この帝国をどのように分割するかを、フランスや旧ロシア帝国（王制）と秘密に協議したのでした。

これが「サイクス・ピコ協定」と言われるもので、イギリスの中東専門家マーク・サイクスとフランスの外交官フランソワ・ジョルジュ＝ピコによって原案が作成されたので、この名がついています。

8

他方、イギリスがアラブ人と結んだ「フサイン＝マクマホン協定」とはどんなものだったのでしょうか。ウィキペディアでは次のように書かれています。

イスラム教の聖地メッカの太守であるフサイン・イブン・アリーとイギリスの駐エジプト高等弁務官ヘンリー・マクマホンとの間でやりとりされた書簡の中で、イギリスは対トルコ戦協力（アラブ反乱）

—を条件にアラブ人居住地の独立支持を約束した。

つまりイギリスは第一次世界大戦で勝利するために、オスマン帝国内部のアラブ人に反乱を呼びかけ、勝利した暁には独立国として承認することを（イスラム教の聖地メッカの太守フサイン・イブン・アリーに）約束したのです。

この「アラブの反乱」で活躍したのがイギリスから送り込まれたトーマス・エドワード・ロレンス（いわゆる「アラビアのロレンス」）でした。

ロレンスはオックスフォード大学卒で英国人です。アラビア語に堪能で中東の砂漠を研究していたのですが、結局は研究よりも「アラブの反乱」で人生の大半を終えました。

私は中学生のころ映画『アラビアのロレンス』を見たとき、その壮大な映画を見て感動したのですが、



イギリス人考古学者トーマス・ロレンス



別名「アラビアのロレンス」

このロレンスが元々は研究者だったのに、イギリスの政策でアラブ反乱軍に送り込まれ、そのイギリスの支援でアラブ側が勝利したことは全く知りませんでした。

他方、イギリスにおだてられて決起した聖地メッカの太守アリーは、イスラム教の預言者ムハンマドの一門ハーシム家の出自でしたから、勝利後、宏大なサウジの領土を自分の王国にできると期待していたのですが、同じ一門サウード家のアブドゥルアズィーズとの戦いに敗れて、惨めな最期を遂えました。

こうして成立したのが「サウジアラビア」でした。この国名は「アラビアのサウード家の王国」を意味します。

もともとオスマン帝国（トルコ）はハーシム家やサウード家の自治や宗教の自由を認めてきていたのですから、わざわざ反乱する必要もなかったのです。が、イギリスの口車に乗せられてアリーは自滅の道をたどったと言えます。

9

最後の「バルフォア宣言」ですが、ウィキペディアでは次のような説明が載せられています。

バルフォア宣言では、イギリス政府の公式方針として、パレスチナにおけるユダヤ人の居住地の建設に賛意を示し、その支援を約束した。

この宣言は第一次世界大戦中の一九一七年十一月二日に、イギリスの外務大臣アーサー・バルフォアが、イギリスの貴族院議員ウォルター・ロスチャイルド男爵に対して送った書簡で表明された。

これはイギリス政府のシオニズム支持表明であり、この宣言をアメリカシオニスト機構に伝えるようロスチャイルド卿に依頼した。

つまり、第1次世界大戦を戦うための戦費を、大富豪のユダヤ人から手に入れようとしておこなわれたのが、この「バルフォア宣言」でした。ユダヤ人ロスチャイルド卿にたいする一種の「ゴマすり行為」だったわけです。

それにしても、パレスチナにはすでにアラブ人が住んでいたわけですから、彼らの了解なしにこんな約束をすることそのものが、そもそも大問題です。これが今日のパレスチナ問題を引き起こす最大要因になりました。

それはともかく、かつて欧州各地で忌み嫌われ、最初はドイツのフランクフルトのゲットーに閉じ込められていたユダヤ人のロスチャイルド家も、この頃にはイギリスにも5人の息子のひとりを送り込み、貴族階級にまで昇進していたことが、この宣言で分かります。

イギリスはこうしてオスマン帝国の広大な領土をフランスやロシアと山分けし、いちばん美味しいところを自分の属国にしたことは言うまでもありません。

10

さて、こうしてイスラエル建国の条件が整ったわけですが、欧米在住のユダヤ人の多くはイスラエルへの移住を好みませんでした。そこは荒地地が多く、ゼロから開墾しなければならなかったからです。

しかも先住民のアラブ人たちとの争いも絶えません。

チヨムスキーも若い頃、イスラエルの「キブツ」と呼ばれる生活共同体に、夫婦で参加したことがあるそうですが、理想と現実の違いに失望してアメリカに帰国したと言っています。

かつての日本の満州国の建設と同じでした。中国には先住民がいたわけですから、その土地を奪って開拓すれば争いが起きるに決まっています。実態が分かるにつれて誰も満蒙開拓団に参加しなくなります。

日本が一九三七年（昭和十二年）に満蒙開拓青少年義勇軍（義勇軍）を発足させた理由も、ここにあったでしょう。

さて、シオニズム運動の指導者たちは、このようにイスラエル建国をすすめたのですが、移住者は集まりません。では指導者たちはどのような手段を講じたのでしょうか。そこで登場したのがナチスドイツとの「ハーバラ協定」でした。

つまりユダヤ人を迫害して、そのような迫害から逃れるためにはイスラエルに移住する以外にはないと思わせることでした。

ですからナチスドイツのユダヤ人虐殺はヒトラーの狂信的行為だと私は思っていたのですが、この原稿を書くために調べているうちに「ハーバラ協定」というものが存在していたことを知り、思わず絶句してしまいました。

何と！アウシュビッツの虐殺に協力していたのは東欧系ユダヤ人、すなわちシオニズム運動の指導者たちだったのです。

この「ハーバラ協定」ということを知ったのは『櫻井ジャーナル』だったのですが、今その箇所を検索しても、かつて読んだ記事を見つけないできませんでした。そこで次善の策として『ユダヤ人論考』

というサイトから引用させていただきます。
少し長い引用になるので節を改めて解説したいと思います。

11

この『ユダヤ人論考』というサイトの23章は、「ハーバラ協定」という題名になっています。
そして、ナチス政権の成立から7ヶ月後の一九三三年八月、ナチス政権と世界シオニスト機構は互いに手を組んで「ハーバラ協定」(シオニスト&ナチス通商協定)を締結したと述べています。
その詳細は、以下の引用をまず読んでください。これは先述の『ユダヤ人論考』からの引用です。

http://www1.s-celnet.jp/0123/Jew_ronkou/yudayajin_ronkou.html

ナチス政権が反ユダヤ政策を推し進めていた頃、ナチス政権に対抗する為にドイツ製品の不買運動を計画していたユダヤ教徒グループや反ファシズム団体があった。

しかし、ドイツ国内のシオニストのほとんどがドイツ製品の不買運動に反対した為、其の不買運動は成功しなかった。其の不買運動に反対した勢力の中で最も重要な役割を果たしたのは世界シオニスト機構であった。

ナチス政権の成立から7ヶ月後の一九三三年八月、ナチス政権と世界シオニスト機構は互いに手を組んで「ハーバラ協定」(シオニスト&ナチス通商協定)を締結した。

この協定はドイツ在住ユダヤ教徒のパレスチナへの移住と彼らの資産のパレスチナへの移送に関する

る協定である。この協定によって、ナチス政権はドイツ製品の不買運動を潰すことが出来た。

ドイツ在住ユダヤ教徒がハーバラ協定を使ってパレスチナへ移住するに際しては、高額のお金が必要であった為、裕福なユダヤ教徒だけがパレスチナへ移住でき、裕福でないユダヤ教徒はパレスチナへ移住できずにドイツ国内に居続けた。

ハーバラ協定は第2次世界大戦が始まるまで維持された。

ナチス政権によるユダヤ教徒迫害が強まる中でも、ドイツ在住ユダヤ教徒の大部分はドイツを去って縁もゆかりもないパレスチナの荒地地へ行きたいとは思っていなかったが、ハーバラ協定に基づいて1億4000万マルクのユダヤ教徒資産がドイツからパレスチナに移送され、裕福なドイツ在住ユダヤ教徒5万2000人がパレスチナへ移住し、パレスチナの土地を買い漁った。

その為、西暦一九三六年から一九三九年までの期間には裕福なユダヤ教徒の大量増加を嫌ったアラブ人による大暴動がエルサレムで続発した。

パレスチナを委任統治していたイギリス政府は裕福なユダヤ教徒のパレスチナへの移住に好意的であった。

世界シオニスト機構はパレスチナに裕福なユダヤ教徒だけを集めたいと思っていた、と考えられる。パレスチナにユダヤ教徒国家を造りたいと思っていたシオニズム指導者は「裕福でないユダヤ教徒にはパレスチナに来て欲しくない」と思っていたはずである。

(中略)

ハーバラ協定によって世界シオニスト機構のドイツ支部はユダヤ教徒団体としては唯一機関紙の発

行を許され、ナチス政権との交渉権を持ち、急速に成長した。

ハーバラ協定の締結（一九三三年八月）以降、ナチス政権と世界シオニスト機構との協力関係は他の領域でも発展し続けた。

世界シオニスト機構はドイツ製品を積極的に購入しただけでなく、ドイツ製品を販売し、ヒトラーとドイツ産業界の為に新しい顧客を作り出してやった。

世界シオニスト機構は一九三六年にはイギリスでドイツ製品を売り始めた。一九三七年には逆鉤十字^{逆鉤十字}の旗の下、20万個のパレスチナ産オレンジがドイツに送られ、更に150万個のパレスチナ産オレンジがベルギーやオランダに送られた。

世界シオニスト機構はエジプト、レバノン、シリア、イラクにおいてはドイツのために新しい顧客を作り出した。ベルギー・オランダ向けのオレンジ輸出はナチスの船を使用するほどにまでなった。

12

このようにシオニズム運動の指導者たちはアウシュビッツに送られて大虐殺されたユダヤ人を救うどころか、その虐殺に手を貸したわけです。

イスラエルのネタニヤフ首相は七月二五日にアメリカ議会会で演説したときも、ユダヤ人は被害者であるかのように主張していましたが、ハマスを挑発してイスラエルに侵攻させ、それを口実に「民族浄化作戦」に乗り出したことは、これまでに何度もふれました。

そして「ハマスを殲滅するまでは戦いをやめない」とも言っているのですが、彼らが毎日のように攻撃しているのは学校や病院、そして民間人であってハマスではありません。逆に言えば「民族浄化作戦」が完了するまでは、ハマスを殲滅しないのです。

というよりも、シオニストはナチスの残虐行為を口実にしてユダヤ人がイスラエルに移住するよう工作したわけですが、今度はハマスによる攻撃を口実にしてガザ地区からパレスチナ人を一掃しようとしているわけです。

しかしガザ住民はイスラエル軍による攻撃を怖れて一斉に国外脱出するという道を選びませんでした。その結果、イスラエル軍による民間人の大量殺戮（しかもそのほとんどは女性と子どもです）は世界中の視線に曝されることになりました。

つまりイスラエル建国にあたっては、東欧系ユダヤ人は同胞のユダヤ人がアウシュビッツで大量虐殺されようが、それを見殺しにしてきたのです。それどころか、それを助長したのです。

それと同じように、今度は、このガザ地区（および西岸地区）でもパレスチナ人の大量虐殺を実行しているのです。ICJ（国際司法裁判所）も、「これはジェノサイドだ、戦争犯罪だ」として、その即時停止を求めるほどの残虐行為でした。

ユダヤ教とは、こんなことを許すほど残酷な宗教なのでしょうか。

イスラエルという国は、「憎まれ嫌われ、差別され迫害されてきたユダヤ人」に祖国を与えるという理由で建国されたはずです。

にもかかわらずイスラエルは、自分たちユダヤ人の受けた「ジェノサイド」という受難を、今度はパレスチナ人におこなおうとしていることは皮肉の極みです。

もしユダヤ教がこんなことを許す宗教であれば、ユダヤ人が忌み嫌われてきたのは当然だと世界中が思い始めるのではないのでしょうか。またこのような蜜行を、「民主主義」を旗印にしているアメリカが黙認または支持するとなれば、アメリカの威信・権威が失墜するのも必然であるように思えます。

自称「神に選ばれた民（ユダヤ人国）」と自称「神に選ばれた国（アメリカ）」に未来はないと私が考える所以です。

13

「ジェノサイド」という用語は、ユダヤ系ポーランド人の法律家ラファエル・レムキンの著書『占領下のヨーロッパにおける枢軸国の統治』（一九四四年）の中で、「政治共同体もしくは民族集団の消滅を目的とした複合的な計画」を表すために用いられた造語だそうです。

そして、この用語を元に、一九四八年二月九日、第3回国際連合総会で採択された「ジェノサイド条約」の第2条では、「ジェノサイド」は次のように定義されています。

「政治共同体、人種、民族、または宗教集団の全部または一部を破壊する意図をもって行われる行為」

そして、この用語は、ニュルンベルク裁判で、ナチス・ドイツが行ったユダヤ人の大量虐殺（ホロコースト）に対して初めて公式に使用されたそうです。

このユダヤ系ポーランド人の法律家による造語「ジェノサイド」が、今度はICJ（国際司法裁判）の判決で、ユダヤ人がつくり出した「イスラエル」という国の軍事行動にたいして適用されたというのは、更なる皮肉と言うべきでしょう。

14

なお最後に一つだけ断っておきたいのは、「反シオニズム」と「反ユダヤ主義」は明確に違うということです。

いまアメリカ国内では大学を中心として、イスラエルの虐殺行為を糾弾する運動が広まっていますが、これには少なからぬユダヤ人が参加しています。

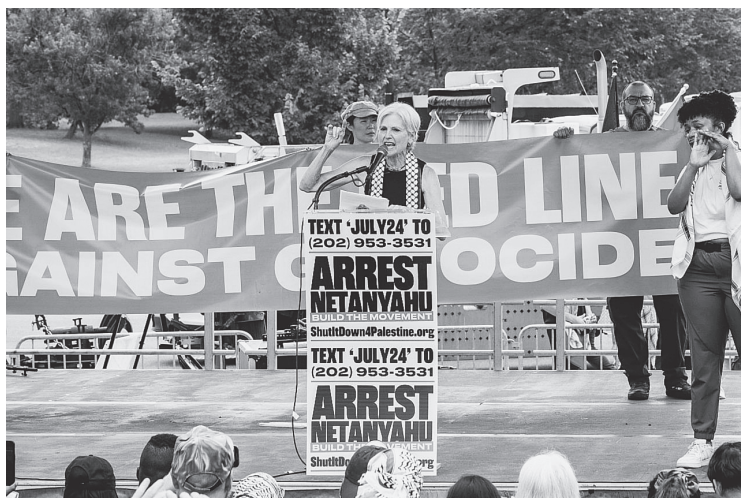
ところがネタニヤフ首相はこの運動を「反ユダヤ主義」「人種差別だ」と非難しています。

しかし、いま世界中で起きているイスラエルへの抗議活動は、ネタニヤフ首相らが先導している「シオニズム」「大イスラエル構想」にたいする反対運動であって、「ユダヤ人」にたいする反対運動ではありません。

その証拠に二〇二四年七月二四日、ネタニヤフ首相の演説に抗議するためにおこなわれたワシントンD.C.における抗議集会には、緑の党から大統領選に立候補しているジル・スタイ女史（ユダヤ人）も参加し、彼女は次のように演説していました。

— 大量虐殺を止めなければならないからここに來たのです。ここには力があります。民衆はこちら側

大統領選候補者ジル・スタイン（ユダヤ人）



にいますのです。

私がここにいるのは、ユダヤ人だからでもあります。私はホロコーストの直後、ユダヤ人居住区で育ち、ユダヤ人のシナゴーグ（礼拝所）に通い、そこで（ナチスから受けた）大量虐殺と向き合いました。

そして、大量虐殺と向き合った、ということは、二度とこのようなことが起こらないようにすることとすべてつながっていったのです。

<http://unimethod.blog.fc2.com/blog-entry-2631.html>

また、「超正統派」と呼ばれる人たちが、「シオニズム運動」「イスラエル建国運動」を非難するだけでなく、「イスラエルという国そのものを解体すべきだ」とすら言っていて驚かされました。彼らは、「イスラエルという国は『メシア（救世主）が再来するまでは建国してはならない』というトラー（聖書）の教えに反する」と言っていたのです。

つまり彼らにとっては、抹殺すべきなのは「パレ

スチナ人」ではなく、ユダヤ教の聖書すなわち「トーラー」（モーセ五書）の教えに反してつくられた「イスラエルという国家」でした。

ですから、「反シオニズム」と「反ユダヤ主義」は明確に違うのです。

にもかかわらずネタニヤフ首相は「反シオニズム」を「反ユダヤ主義」だとして攻撃しています。これも自分を正当化するためには事実をねじ曲げても平気だという彼らの姿勢をよく示しています。

これでは、「神に選ばれた民と自称する国」の未来は暗い、と言われても仕方がないでしょう。

何しろ、ナチスと「ハーバラ協定」という密約を結び、570万人という同胞を「絶滅収容所」という祭壇に、生け贄として捧げて建国されたのがイスラエルという国だったのですから。それがシオニズムという運動だったのですから。

〈追記〉

超正統派ユダヤ人のひとたちがイスラエルの建国に反対する理由はウイキペディアでは次のように書かれています。

超正統派はイスラエル領土となる前のパレスチナ地域にも定住していた。

パレスチナ人の地域の領土を奪いイスラエルを建国した事に対し、超正統派の一部はイスラエルが

聖書の「汝、殺すなかれ、盗むなかれ」に違反しているとして、「彼らは禁忌を犯した」という認識を持つ。

「聖書の教えに反した行いは同胞といえど肯定できない」とし、「メシア（救世主）が現れないと真のユダヤ国家は実現できない、しかし、まだメシアは現れていない、だから現在のイスラエル国家は偽物であり、認められない」、「メシアが現れるまでは建国を待つべきだ」という立場をとっている。

ここには書かれていませんが、先述のとおり彼らは「トーラーには、メシア（救世主）が顕れるまでは建国してはならないと書かれているが、現行のイスラエル国は聖書の教えに背いているから解体すべき」とも主張しています。

ですから、ネタニヤフ首相の聖書を根拠にしたパレスチナ人の虐殺は、ますます許すことの



超正統派ユダヤ人の集会「我々はシオニストとして生きるよりも、ユダヤ人として死ぬことを選ぶ」

<https://www.972mag.com/haredi-protest-army-conscription-ruling/>

出来ない蛮行ということになります。

なお、いわゆる「シオニスト」のイスラエル建国に反対する超正統派の運動を描いたドキュメンタリー(21分)を見つけたので、以下に載せておきます。

* Rebel Rabbis: Anti-Zionist Jews Against Israel (反逆するユダヤ教の指導者たち…反シオニズムのユダヤ人がイスラエル建国に反対する)

<https://www.youtube.com/watch?v=FkplabTRuak>

〈本章のキーワード〉

ビグマリオン効果

ICJ (International Court of Justice、国際司法裁判所)

超正統派ユダヤ人

アシュケナージ (東欧系ユダヤ人)

スファルディ (南スペイン・北アフリカ・西アジア系ユダヤ人)

ハザール王国（七～一〇世紀にカスピ海・黒海近辺に栄えた遊牧民族の国家）
シオニズム（ユダヤ人の故地シオンにイスラエル国家をつくらうとする運動）

ジェノサイド（GENOCIDE、集団殺戮、法律家ラファエル・レムキンの造語）

ジェノサイド条約（第3回国際連合総会一九四八年二月九日で採択された国際条約）

イギリスの「三枚舌外交」

サイクス・ピコ協定（英人サイクスと仏人外交官ピコによるオスマン帝国の分割案）

フサインⅡマクマホン協定（イギリス高官マクマホンがメッカの太守フサインにした約束）

バルフォア宣言（イギリス外務大臣バルフォアがユダヤ人富豪ロスチャイルドに送った手紙）

ハーバラ協定（東欧系ユダヤ人がヒトラー・ナチスと結んだ秘密協定、シオニスト&ナチスの通商協定）

シユロモー・サンド（Shlomo Sand、イスラエルの歴史学者、著書『ユダヤ人の起源』）

ジル・スタイン（Jill Stein、大統領選立候補者、ハーバード卒、医学博士、ユダヤ人）

トマス・ロレンス（Thomas Lawrence、考古学者、イギリス軍人「アラビアのロレンス」）

ラファエル・レムキン（Raphael Lemkin、ユダヤ系ポーランド人の法律家、「ジェノサイド genocide」という用語を造語した。「種族 genos」と「殺害 cide」の合成語）